

第2章

既存のグループ情報基盤をどう活用するか 効率的な情報収集のための デジタルインフラ構築

グループ情報基盤の 全体像の検討

前述の考え方に基づき、具体的なデジタルソリューションを選定するにあたっては、まずグループ情報基盤のあるべき全体像、青写真を描くところからスタートする必要がある。

その際には、4つのシステムレイヤー別に概要要件を検討する。

(1) データ収集レイヤー

1つ目は、グループ各社からデータを集めるレイヤーである。このレイヤーにおいては、次のポイントで概要要件を検討する必要がある。

① データの収集方法

データの収集方法としては、即時性・正確性の観点から、グループ各社のシステムからグループ情報基盤にシステム→to→システムで自動データ連携できることが最も望ましい。

そのためのAPI(Application Programming Interface)などの接続の口は豊富か、プラグ・イン方式で容易に接続可能か、あるいは高度なプログラミング知識がなくともシス

【この章のエッセンス】

●グループ会社からの情報収集という観点では、すでに制度連結やグループ業績管理のしくみが存在するため、そこに相乗리することがシステムROOの観点、およびデータガバナンス観点から望ましい。

●デジタル基盤の構築にあたっては、データ収集・格納・活用、および周辺機能という各レイヤー別の重要論点に留意のうえ、導入を検討する必要がある。

既存のデジタルツールの活用

非財務情報収集のしくみ構築にあたり、デジタル基盤はどのような考

え方で検討・整備すればよいのだろうか。前述のように非財務情報の収集のみを目的としたシステム投資は社内承認を得られにくいものであるし、制度連結用、グループ業績管理用、非財務情報開示用と、グループ内部情報、データ基盤がバラバラに散在することは、業務運用上もシステムアーキテクチャ上も望ましいものではない。

となると、既存のグループ情報基盤のしくみに相乗リすることが、最もコスト効率が高く、かつ合理的な判断であるといえる。

具体的には、「既存のグループ情報基盤」への相乗リとして2つのアプローチが考えられる。

1つは制度連結用の情報基盤への相乗リ、そしてもう1つは、BI(Business Intelligence) / BPM(Business Performance Manage-

ment)と呼ばれる、グループ経営管理のための情報基盤への相乗リである。

制度連結、グループ経営管理のどちらにも共通していえることは、グループ各社からの情報収集のルートがすでに確立していることである。ITシステム、業務プロセス、そして担当者間の人的ネットワーク、いずれの面においてもすでにできあがったものがあり、これを活用しない手はない。

実際に制度連結ツール、BI/BPMツールの各々のソリューションベンダーのなかには、ESGテンプレート等を準備し、この領域の課題解決手段の提供に乗り出しているベンダーも複数社存在する。